

私の勇気とおばあちゃん

わたし ゆうき

今治市立立花小学校 五年
伊藤 明紗

私のおばあちゃんは、耳が聞こえません。私は赤ちゃんの時から、おばあちゃんとずっといっしょに生活しています。おばあちゃんの耳が聞こえないことも、ジェスチャーや手話などを使って話すことも今では当たり前前の生活です。しかし、この当たり前前の生活になるまでには、いくつかの困りごとがありました。小さい時は、自分も思うように話せないため言いたいことが伝わらずイライラしました。文字も書けないのでなかなか伝わらない事もありました。話しかけようとしているけど、気づいてもらえず悲しい思いをすることもありました。運転中は、前を向いているので話すことができず困ることもありました。なかなか伝えられないことが続くと、今度はくふうをして伝えてみようと考えようになりました。ジェスチャーをしたり、大きくゆつくり言ったり、くり返し伝えようとする、おばあちゃんも「何を言いたいのかな」と読み取ろうとしてくれました。そのような積み重ねを続けたある日、おばあちゃん

いくらいの小さな声でしか発表することができませんでした。しかし、このできごとをきっかけに、おばあちゃんに大きな口やジェスチャーで伝えることを毎日続け、伝える事への自信が持てるようになりました。私だってみんなに堂々と言いたいことを伝えることができるぞと自信と勇気がわき、参観日の発表も堂々と大きな声で発表できるようになりました。

私は、おばあちゃんとの会話がどのようにすれば伝わるか、いつも相手の立場になって考えて、話すようになりました。そして何でもおばあちゃんに伝えられるようになり、おばあちゃんからも「めいさの手話はわかりやすい」とたいこばんをおしてもらえらるまでになりました。私はいくつかの困りごとなくふうすること、おばあちゃんとの会話が当たり前前の生活になりました。くふうだけでなく、相手に伝えたい、相手にどうすれば伝わるかを一生けん命考え伝えることで、自分の思いを伝えられるようになるのです。コミュニケーションが苦手という人は多いと思います。私もその一人です。しょうがいがあるなしに関係なく、人との会話には、おたがいの事を知ろうとする努力が重要です。そしておたがいの事を知ろうとする努力に、やさしさと思いやりを伝えたいという強い気持ちを通していかなければいけません。めんどろなそう思う人も私だけではないと思います。でもその会話の先には、おたがいの知

んに「伝えられた」と思えるできごとがありました。おばあちゃんにすしおけを借りに行った時、お兄ちゃんが伝えられず借りることができませんでした。するとお母さんが、「めいさ、もう一度おばあちゃんに言ってみて」と言われました。お兄ちゃんが伝えられなかったのに、私で伝わるんだらうか。どんなふうに言えばいいんだらう。すしおけってどういうふうでジェスチャーすればわかるかな。すしおけだからすしの手話と入れ物を表現すればいいかなというろいろ考えながらいきました。私はおもいつき大きな口を開けて、ジェスチャーと大きな口で「す・し・お・け」と言いました。するとすぐに伝わり、すしおけをかりることができました。私が「伝えられた」このできごとは、私の大きな自信になりました。私は、もともとみんなの前で話したりすることがとても苦手です。一年生の時はみんなの前で発表できず、先生に通やくしてもらったこともありましたが、二年生の時は、みんなの前で発表できましたが、聞こえない

らない思いや知らない世界があつて、私のように自分の勇気と強さになるのです。しょうがいがある人もない人も関係なく、自分の言いたいことを言うのでなく、相手の事を知ろうと相手の立場に立つて考えなければなりません。そうすればみんながわかりあえる明るい社会になると思います。

障害者というコンプレックスをもちながら、 自分らしく生きるには

山鹿市立山鹿小学校 五年
おかげのすけ
岡口虎ノ介

ぼくは、発達障害をもっていますが、見た目には、わかりにくいです。かんとんに説明すると、音や光に敏感で皮膚の触れた感触も、健常者の人には、何ともない事でも、より冷たく、より熱く、より痛くかんじてしまい、つい大きな声も上げてしまいます。

そして頭の中で考えている事が整理できないまま、とっさに言葉に出してしまい、相手にご理解させて、口論になった時に、衝動的になって、相手を叩いたり、けつたりしてしまいます。本当はあまりたくても、何て言っているのか、わからなくて、頭の中がからっぽになり、苦しくなります。

だけど、ぼくのまわりには、自分と同じ特徴や痛みや苦しみを持ちながらも、がんばっている友達がいるのでうれしく思います。母は、「健常者の考えはこうである。」とか、「健常者は、何をがんばっているから、あなたも同じ様に努力しなければ、将来、一人では、生きていけない」と、言われ続けられました。

基本を教えてくださいました。

退院する頃には、前向きな気持ちになりました。以前は障害を持っている事に、コンプレックスに思っていました。が、ぼくは、ぼくだとわかりました。人は、こうあるべきとか、へん見をやめて、たとえ、人と価値観が違ってても、相手を否定せず、自分に自信をもって生きていこうと思えました。

これからは、障害があるとか無いとか区別せず、困っている人がいれば、助けてあげられる人間になりたいです。

果たして、そうなのか…と、最近考える様になりました。障害がある事は健常者と比べて、本当におとつているのか…。人に迷惑をかける事は、自分は無意味な存在なのか…。母の考え方にこん乱していました。

そんな中、ぼくは、ゲーム依存症をわずらい三カ月病院に入院しました。

病院の中で出会ったのは、ぼくと同年代の子達ばかりでした。見た目には、どこが病気で障害をもっているかわからなかったです。でも付き合っていく中で、ぼくと同じ様に、コミュニケーションが苦手な子や、ゲーム依存になって、日常生活ができなくなった同じきょうごうの子達が沢山いておどろきました。病院のスタッフさんは、みんな心のケアのスペシャリストでした。トラブルが起きても、どちらだけが悪いといった決めつけた言い方はされず平等に、話をきいてくれて、興奮した時は、落ち着く場所に移動して一対一で対応してくれました。そこで人間関係の

チョコレートのおかしから考えたこと

かんが

津山市立南小学校二年
くさかなおこ
日下菜穂子

五月二十二日に、わたしのかよっている小学校のうんどうかいがあるよていでした。しんがたコロナウイルスのきんきゅうじたいせんげんがでたのでうんどうかいはいえんきになりましたが、おかあさんがうんどうかいをがんばったごほうびにおかしをかってくれました。

きれいなちやいろのはこの中に、イチゴとキウイとパイナップルのドライフルーツにチョコレートをかけたおかしが入っていました。

「このチョコレートは、しょうがいのある人が一つ一つ手づくりでつくったんだよ。」とおかあさんがおしえてくれました。わたしは、一つ一ついいねにおかしをつくりあげているなあとおもいました。おかしのはこの中には、お手がみが入っていました。

「心をこめてほうそう、はこづめをしました。」とていねいな字でお手がみに書いてありました。おかしをたべてみると、チョコレートとくだものあじがしてとてもおいし

かったです。二さいのいもうともおいしそうにたべていました。

しょうがいのある人が、とてもおいしいチョコレートのおかしをつくらっていたのでかんどうしました。ほうそう、はこづめもていねいで、はこの中に入っていたお手がみもとてもうれしかったです。

「しょうがいがある人もじ分ができることを見つけて、はたらいてお金をかせいでいるよ。そのお金でほしいものを買ったりして、生かつをしているよ。」

とおかあさんがおしえてくれました。

その話を聞いて、おとうさんの友だちで目の見えない人もマッサージのしごとをしていることをおもいだしました。まえになんどかでんわではなしたことがあります。とてもやさしい人でした。マッサージのしごとをしながら、けつこんして子どもをそだてているそうです。

もし、わたしにしょうがいがあっても、学校やしごことに

行きたいです。いえにずっとこもるのではなくて、そとにでてくらししていきたいです。なぜかというところ、それがふうの人げんのくらしだと思っからです。そういつたしゃかいにしていくために、わたしもじ分のできることを見つけてとりくんでいきたいです。

私の病氣

わたし びょうき

島原市立第一小学校 六年
林 真緒
はやし ま おお

私は、先天性ミオパチーという病氣を持って生まれてきました。先天性ミオパチーは、十万人に三〜五人、国内に千〜三千人います。この病氣の特徴は体が柔らかい、筋力が弱い、筋力低下、つかれやすい、扁平足、朝なかなか起きられない、十分睡眠をとっても日中、眠いなどいろいろな症状があります。一口でいうと、筋肉が他の人とはちがう特徴をもっているということのようです。そのため学校ではみんなと生活のしかたが違うところがいくつもあります。

一つ目は、シューズに足底板という器具を入れているので、みんなと同じシューズを履くことができません。

二つ目は、脊柱側弯症せきつうそくまげんもあるので、椅子にも姿勢維持のための器具をつけています。

このように、他の人と違うところがあるため、初めて会う人に、「かわいそう…」「障害だから…」「特別…」と言われることがあります。私は治らない病氣だから、きつとこれからも、一生言われる。そう覚悟していますが、同情さ

れるのは、少し嫌でした。でもだからといって「同情しないで。」というのも嫌でした。だから、同情されてもいいから、理解を深めてもらおうと、できるだけ、自分の病氣のことも話すようにしています。

そんな私にクラスの友達は、いろいろなサポートをしてくれます。

私は、走るが遅いので、運動会のリレーの時は、チームのリーダーが、バトンゾーンのどの位置に立つのか、順番はこうしよう。など話し合っつて、私が走っても、スムーズにリレーが進むようにしてくれます。

また、マラソンの練習の時は、みんなが終わっても私だけ終わらないことが多いので、走り終わった人も、私のペースに合わせて、もう一度一緒に走ってくれたり、ずっと、「がんばれ!!」「あと〇周!!」と声をかけてくれます。

それと私は、椅子に器具をつけているので、重くて自分で運ぶことができません。すると、必ず友達が、「私が持つ

から、真緒ちゃん私の持つて。」と自分の軽い椅子と交換して持ってくれたりします。

去年は、友達二人で、どちらが私の椅子を持つかで喧嘩になることもありました。その時は、喧嘩を止めるのが大変でしたが、とてもうれしくなりました。

こんな私のことを理解してくれている友達が大人になった時、私と同じ病氣や、体が不自由な人に出会ったら、きつと、やさしく声かけをしたり、サポートしてくれるだろうと思います。そして、そういう人がどんどん増えていけば、体が不自由な人も、住みやすい世の中になると思います。

私は、自学で自分の病氣について調べたり、足が不自由な人や体が不自由な人のことを知るセミナーがあつたら行くようにしています。

そして、私も、もつと、自分の病氣や他の難病などについても勉強していきたいと思います。

そして、少しでも、そんな人達ときずなを深めたり、手助けができる人になりたいです。

ぼくの恩返し

おんがえ

日立市立豊浦小学校 六年
 やまぐち けいし
 山口 慧 士

「喜一翔は神だ。」いところ言いました。喜一翔はぼくの一つ下の弟です。弟は、身体と知的に障がいがあり、重症心身障がい児と言われています。重症心身障がいとは、重度の肢体不自由と重度の知的障がいとが重複した状態を言います。それでも神だと言うのには理由があります。弟が自分で出来る事はほとんどありません。話す事もできないのですが、本を見たい時、DVDを見たい時は、声を出したり、表情で教えてくれます。それを見のがさない様に、弟が喜んでくれる様に、ぼくは急いで行動します。面どくさがりなぼくを一しゅんにして動かす力を持っています。

まわりを笑顔にしてくれます。弟の学校の先生、通っている肢体不自由児のし設の先生、そこに通っているお友達のお母さん達、別のし設の方々に「きいちゃん、すごいね。」と言ってもらえるのですが、言ってくれる人達全員が、いつも笑顔なのです。ぼくは、お母さんを怒らせる天才ですが、弟はみんなを笑顔にできる天才です。

りも、家族の大切さを教えてくれたんだよ。」と言いました。そして、「障がいを持っている人は、人に助けてもらう事はあっても、迷わくはかけていない事を忘れないで。」とも言いました。

ぼくは大好きな弟が、教えてくれた事がたくさんあると知って、「やっぱり神だ。」と思いました。だから弟に負けないう様に、むねを張って兄だと言える様に一緒にがんばっていきたいと思います。そして、弟がたくさんの人に優しくしてもらった事は、ぼくが困っている人に優しくして恩返しをしていきたいです。

弟が病気になる、障がいが残ってしまおうと分かった時、お父さんとお母さんは、とても泣いたそうです。この先どうしたらいいのか、先の見えないトンネルに入ってしまったと思っただけです。でも、その時の二人の気持ちを聞いたぼくには、あまり理解が出来ませんでした。なぜかと言うと、障がいがあっても弟は弟だからです。自分の思い通りに体を動かす事は難しいけれど、たくさんの人に優しくしてもらい、たくさん笑う様になった弟。いやな時は、大きな声で泣いていたのに、だまって目を閉じる様になり、今では、がまんする事も出来る様になって、色々成長している弟をいつも見知っているからです。

ある時、お母さんは言いました。

「喜一翔の障がいがなかった方が良かったけれど、あったからこそ、たくさん分かった事があるんだよ。たくさんのお会い、人の優しさ、支え合う事、助け合う事、がんばる事、時には落ち込む事があっても、何とかなる事。そして何よ